

野洲図書館 事業評価シート【令和6年度（2024年度）】

Ⅰ	市民の必要とする資料と情報の提供																															
<p>市民一人一人の知りたいこと、学びたいことに対して適切な資料を提供することは、憲法等に定められている学習権を保障する非常に重要な社会的機能です。また読書という営みには、新たな知見を得るという事のみならず、人や社会への理解を深め、心を豊かにするなど計り知れない価値があります。</p> <p>野洲図書館は、市民が読みたい本を提供する、市民が知りたい情報を得られるという図書館の基本的機能の質を向上させ、またその件数を増加させるよう努めます。</p>																																
<p>◆活動の方針</p> <ol style="list-style-type: none">蔵書の魅力を向上させるため、選書の質・本の見せ方・求める資料へのアクセスのしやすさを工夫しますレファレンスサービスのPR及び回答の質の向上に努めます普段図書館を利用しない人へ来館を促すPRを行います積極的に特集展示を実施し、様々な分野の本へのアクセスを促します																																
<p>令和6年度取組み実績</p> <p>本年は図書購入費の減少を受け、より厳正な選書を心掛けたほか、書店の持込による見計らい選書を積極的に招致し、現物を見て検討する機会を得ることで、より質の高い資料の収集を行うことができた。高齢者向けの出張お話し会などで、レファレンスサービス、または、アル・プラザ野洲での移動図書館や駅の予約本受取ボックスについて、積極的にPRを行った。これにより、一定の新規登録・再登録があった。本年は出版社との連携により地域をテーマとする特設展示会を開催できたほか、常設の特集展示を間断なく実施し、利用者が普段手に取りにくい資料へアクセスする機会を提供した。</p>																																
<p>成果指標と目標</p> <table border="1"><thead><tr><th>指標名</th><th>R5実績</th><th>R6目標</th><th>R6実績</th><th>達成率</th><th>R7目標</th></tr></thead><tbody><tr><td>個人貸出し冊数（野洲市民）</td><td>445,917</td><td>430,000</td><td>418,119</td><td>97.2%</td><td>450,000</td></tr><tr><td>実利用者数（野洲市民）</td><td>8,627</td><td>8,250</td><td>8,303</td><td>100.6%</td><td>9,000</td></tr><tr><td>レファレンス件数</td><td>5,719</td><td>5,000</td><td>3,696</td><td>73.9%</td><td>5,000</td></tr><tr><td>レファレンス満足度(%)</td><td>99</td><td>95</td><td>98</td><td>103.2%</td><td>95</td></tr></tbody></table> <p>自己評価</p> <p>C</p>			指標名	R5実績	R6目標	R6実績	達成率	R7目標	個人貸出し冊数（野洲市民）	445,917	430,000	418,119	97.2%	450,000	実利用者数（野洲市民）	8,627	8,250	8,303	100.6%	9,000	レファレンス件数	5,719	5,000	3,696	73.9%	5,000	レファレンス満足度(%)	99	95	98	103.2%	95
指標名	R5実績	R6目標	R6実績	達成率	R7目標																											
個人貸出し冊数（野洲市民）	445,917	430,000	418,119	97.2%	450,000																											
実利用者数（野洲市民）	8,627	8,250	8,303	100.6%	9,000																											
レファレンス件数	5,719	5,000	3,696	73.9%	5,000																											
レファレンス満足度(%)	99	95	98	103.2%	95																											
<p>令和6年度は空調更新工事のため、約1か月間の休館があり、その後も空調なしで冬季開館を行い、館内が相当冷え込んだことから来館が控えられ、実利用と貸出冊数の落ち込みへとつながったものと考えられるが、当初危惧したほどの大幅な減少ではなかった。レファレンス件数の大きな減少は、一部常連利用者の問い合わせがなくなった点があるものの、具体的な理由は不明。レファレンス満足度は、目標値は超えたものの前年度より微減となっている。</p>																																
今後の課題	<p>令和7年度の活動方針</p> <p>図書館サービスのPRを積極的に行い、市民の来館を促す</p> <p>特集展示を継続して実施し、本との出会いの機会を増やす</p> <p>限られた資料費の中で、最大限に魅力的な資料の収集に努める</p>																															
<p>図書館協議会評価</p> <p>・空調更新工事・資料費削減など利用減に陥る状況下の中で、特設コーナー・出張お話し会・移動図書館・受け取りボックス・図書館イベント・選書など利用者を減らさないための様々な工夫や努力を行っていただいていることは評価できる。</p> <p>・なかでもレファレンス満足度の達成率が100%を越えていることは、利用者として高評価に値する。</p> <p>・本価格の上昇が続く中で、図書費の確保には継続して取り組んでいただきたい。本があつての図書館です。</p> <p>B</p>																																
<p>A：目標を達成できた B：目標をある程度達成できた C：目標をあまり達成できなかった D：目標を全く達成できなかった</p>																																

(評価する点)

- ・特集コーナー、出張お話会、アルプラザ野洲での移動図書館、受取りボックス、図書館イベントなどとても幅広い活動をしていただきありがとうございます。
- ・さまざまな事情がある中、個人貸出し冊数(野洲市民)の達成率が97.2%、レファレンス満足度(%)が103.2%、など数字としても、取り組み(姿勢)としても、高評価に値します。
- ・特設コーナーでの図書展示や集会行事で市民と本、市民と図書館をつなぐ活動を活発にされている。
- ・資料費予算が減少する中、従来通りではない選書により良質な図書を厳選して購入するなどご苦労をいただいていることを評価する。一方で図書冊数を以前の水準に戻すべく、引き続き戦略的に予算を要求して欲しい。
- ・(レファレンス件数は指標設定済みのため恐縮ですが)レファレンス満足度が100%に近いまたは超えているのであれば、サービスとしてはAでよい。
- ・時事等にちなんだ特集コーナーの創設や話題本の陳列などが魅力的な棚作りとなっており、閲覧や貸出冊数増を下支えしていると思われる。
- ・空調更新工事の影響が少なかったことは、これまでの取り組みの成果です。継続、そして新たな活動を展開されることを期待します。
- ・レファレンス件数が減っているものの、その中でも満足度は100%を超えている。

(課題と考える点)

- ・4つの活動方針のうち、「3 普段図書館を利用しない人への来館を促すPRを行います」以外の3つはとてもよく活動していただいていると思います。PR不足は、以前からの課題です。
- ・リファレンスの減少は、図書館への来館者数が減っていることが要因の一つかもしれません。
- ・ブックモービル(本の配達)を考える時期が来ているのかもしれません。
- ・図書購入費の減少の中図書館の各種取り組みは十分評価できる。ただ「市民が読みたい本を提供する」「市民が知りたい情報を得られる」という基本機能に立ち返ったとき、不十分さは否めない。新しい本を揃えたからと言って利用者が増加するとは限らないが、市民はより新しい情報に飢えているし、SNS上でも新刊図書の情報は拡散されているので、それに応じられるような図書館であってほしい。図書購入費に関しては最低でも令和5年度以前の水準へ戻してほしい。今後の行政機関との交渉に期待している。
- ・時代の流れとして本離れが進む中、目標設定のあり方等、見直しが必要ではないかと思います。
- ・資料費の減少で購入冊数が減少するからこそ、未所蔵資料へのリクエストが重要になると思います。館にある資料だけでなく、あらゆる資料に対して利用が開かれていることをアピールして豊かな資料提供がされることを望みます。
- ・集会行事の時に関連する図書の展示・貸出や未所蔵資料も含むブックリストの提供など、資料要求自体を喚起する方策も大事かと思います。
- ・商業施設での貸出し業務の実施など継続して実施する施策の他、図書館サービスの新鮮な情報を発信する媒体の利用を含め引き続きPRに努めて欲しい。
- ・レファレンス満足度については、利用者からの問い合わせについては概ね満足を得られる結果となっており評価できる。ただ、満足できていないものも件数的には少なくない(R6では、3,696件×2%÷74件)。この74件がどのようなものであったのか、今後の対応に改善の予知があるものなのか、そのあたりの説明が欲しかった。
- またレファレンスサービスを件数のみで一括りに評価していることに対し少し違和感を覚えた。資料②にある項目「文献調査」「事実調査」については、図書館の真価を発揮すべきところでもあり件数以外に評価につながる“何か”説明があってもよいと感じた。さらには、これら「調査依頼」を待つだけでなく、図書館が仕掛けたことにより「調査依頼」が増えた、という流れが今後できていくことにも期待したい。
- ・普段図書館を利用しない人が、図書館に入った時、利用しやすいような工夫を希望します。

野洲図書館 事業評価シート【令和6年度（2024年度）】

2

こども、若者と本をつなぐ

乳幼児期から児童期にかけては、本と接することにより、ことば（語彙）を獲得し、考え、判断し、行動するための基礎的な力だけでなく、豊かな感受性・心を育むことができる、きわめて重要な時期です。ヤングアダルト（YA）になるとより高度な知見や文脈を読み取るようになり、本を通して自らの社会を広げ、社会へはばたくための力を養います。この時期に読書をしたという経験は、やがて歳を重ねたときに本を読むための素地となります。

◆活動の方針

- 1 読書の魅力・楽しさを最大限PRします
- 2 「良書より適書を」を基本に、一人一人が必要としている本を提供します
- 3 ひとりひとりの成長の度合いに合わせて「次の読書」へステップアップできるよう工夫します
- 4 園や学校と連携し、より豊かな読書環境を提供できるよう支援します

令和6年度取組み実績

読書の楽しさを感じてもらうために、市内小学校全クラスでブックトーク・お話会を実施。「としょかんBOX」の運用も継続し、常に子供たちの身近に本がある環境を提供することができた。日常の選書も人気の本だけでなく、子どもに読んでもらいたい良書もバランスよく購入することを心がけ、幅広いジャンルから本を選べる環境づくりを行った。夏休みに開催するイベントについて、本年は特にYA世代を対象としたものも実施することで、幼少期から青年期への連続した利用を促した。また学校との連携として、学校図書館支援員を介して、より密な学校連携を行い、調べ学習のための資料の提供を実施した。さらに、本年は養護学校とも連携し、障がい程度に応じたお話会や図書館見学を実施した。

成果指標と目標

指標名	R5実績	R6目標	R6実績	達成率	R7目標
（市民）児童書貸出冊数	153,254	146,000	144,925	99.3%	150,000
年齢別実利用者数（7-12歳）	1,202	1,200	1,171	97.6%	1,200
年齢別実利用者数（13-18歳）	514	550	455	82.7%	550
年齢別貸出冊数（13-18歳）	15,947	16,500	15,093	91.5%	16,500
自己評価					B

全て目標値に到達せず、前年度より減少している。学校や園を対象とする本のボックスセットの巡回貸出し実施や、学校でのブックトーク・おはなし会の実施、調べ学習への資料協力などにより、子どもの身近に本がある環境は醸成されてきたと考えるが、一方で来館利用が伸び悩んでいる。野洲図書館は子どもだけの来館が難しい立地でもあり、子育て世代へのPRと子連れでの来館を促す取り組みが課題である。また、ボックスセットの本の多くが古びて傷んできており、内容の刷新か、あるいは別の方途の検討が課題となっている。

今後の課題	令和7年度の活動方針
<ul style="list-style-type: none">・子どもの身近な場所に本との接点を確保する（幼保、学校、学童などとの連携）・ヤングアダルト世代の利用を増やす・子どもの来館を促す施策の検討	<p>学校・園との連携の維持・強化 ヤングアダルト向け新規事業の実施</p>

図書館協議会評価

- ・学校や園と連携し、一過性ではなく子供の身近に本がある環境づくりに取り組んでいることが評価できる。
- ・もう一步踏み込んで、学校と連携した取り組みやイベントを提案でき、実施できることよいのではないか。
- ・中主分館は、まだ子供たちだけでも行ける範囲にあるように思う。もう少し、子供たちが行きやすい雰囲気にできないか。
- ・リクエスト本の学校（図書室など）での受け渡しができると子供たちの利用が増えないでしょうか。

B

(評価する点)

・野洲図書館としては、さまざまな取り組みを積極的に進めていて、高評価に値します。ただし、図書館だけでは解決できない課題も多く、交通アクセスの課題、学校関係の課題などは、野洲市、及び野洲市教育委員会との連携強化、及び、その機関の力点の置き方が大きなカギとなります。そこは粘り強く、訴え続ける必要がある。

・学校や園と連携し、子どもの身近に本がある環境づくりに様々な形で取り組まれている点。

・学校と連携した取り組みにより、一過性ではない本を読む環境の創設に寄与していることを評価する。

また今後、対象の年齢によっては、図書館での単独イベントは集客が難しいこともあるため、学校の他各種施設や団体との共同実施も今後検討して欲しい。

・各種取り組みを行うことで「子どもの身近に本がある環境が醸成されてきた」ことは、評価できる。次の段階として「来館へと繋げる」ことを課題としている。活動の方針は、「ひとりひとりに合わせステップアップする」。このことを心掛け、ことを急がずこの課題に取り組んでいくことを期待したい。

・貸出冊数や利用者数は、前年比・目標比ともに到達できず減少も見られるが、市内小学校全クラスへブックトークやお話会を実施したことや、養護学校にて障害程度に応じたお話会や図書館見学の実施は素晴らしい功績と思う。

・学校司書は大きな前進である。

(課題と考える点)

・子どもの数の推移と目標値の推移とは一致していますか。背伸びになってしまいませんか。

・野洲図書館は、子どもだけで来館しやすい立地になっているのかもしれません。親子で来館してくださいと言ったときに、自分の経験からは、中学、高校になると親に何を読んでいるのかを知られたくなった記憶があります。リクエスト本の学校図書館での受け渡しはどうでしょうか。

・子供と本をつなぐには学校側のとりくみが重要と思われる。各学校が本気で読書推進に取り組んでもらいたい。先生方は口では読書の大切さはうたうが、具体的な取り組みをされている学校は少ないようだ。図書館だけの取り組みでは難しいと思う。教育委員会事務局から各学校にもっと訴えかけてほしい。そのように図書館からも提案してほしい。

・図書館だけでは解決できない課題（交通アクセスの課題、学校関係の課題など）は、そこは粘り強く、訴え続ける必要がある。

・直接来館の面のみでいえば、乳幼児から児童については、自己評価にあるように「子育て世代へのPRと子連れての来館を促す取り組み」の開拓・推進が課題であると思います。中高生に関しては、事業概要を見る限り、図書館見学など、本や図書館への興味が薄い生徒も（言葉は悪いが）強制的に来館の機会を作るような取り組みが見当たらませんでした（中学校の職場体験の受け入れもなしでしょうか）。相手のあることですが学校側にも働きかけてそのような機会が増えればと思います。

・昨年にも書きましたが、「子ども、若者と本をつなぐ」という場合には学校との連携（学校（図書館）を通じたサービス、学校へ出向くサービス、学校読書への支援）のウェイトが大きくなると思います。もし この考えが妥当ならば、指標がこれでよいのかどうかの検討もこの先には必要になると思います。

・中主分館は、近くに小学校、少し距離がありますが中学校もあります。子供たちだけでの利用も可能かと思います。分館がもう少し子供たちが行って楽しいなあという雰囲気、レイアウトになることを望みます。

野洲図書館 事業評価シート【令和6年度（2024年度）】

3

誰もが利用できる図書館サービス

公共図書館は、市民の誰もが利用できる施設であるべきですが、様々な理由により図書館を使いづらい人々もいます。野洲図書館では主に障がいのある方を中心としたバリアフリーサービスや、日本語を母語としない方への多文化サービスなどをすすめてきました。しかしその他の要因、例えば、図書館まで遠い、車の免許がない、休日でも図書館利用が難しいなど、来館しての図書館利用が難しいと感じている方も多いということがわかっています。そこで、誰もが利用できる図書館サービスのあり方について、検討を進めていきたいと考えています。

◆活動の方針

- 1 郵送貸出や宅配の周知と利用の拡大をすすめます
- 2 大活字本やLLブック、多言語の資料の収集をすすめます
- 3 非来館型のサービスについて検討をすすめます

令和5年度取組み実績

野洲駅に予約本受取ボックスを設置（延べ4,353人、13,414冊貸出し）とアル・プラザ野洲での移動図書館事業の開始（延べ288人、1,342冊貸出し）。郵送宅配サービスの利用は微減。大活字本受入れ（61冊）、外国語資料受入れ（63冊）、小篠原自治会（小篠原ふれあいサロン）への出張おはなし会を実施し、アル・プラザ移動図書館や各種サービスのPR。小中学校向け移動図書館は3校に実施。

成果指標と目標

指標名	R5実績	R6目標	R6実績	達成率	R7目標
郵送貸出、宅配の実利用者数	19	20	18	90.0%	22
野洲駅予約本受取ボックス貸出者数	4,562	4,500	4,353	96.7%	4,500
（学校対象以外）出張貸出貸出数	1,036	1,100	1,342	122.0%	1,300
自己評価					B

予約本受取ボックスは常にフル稼働している状態。待機者数が一向に減らず、アンケートからも待ち時間への不満が伺えたことから、令和7年度は取り置き期間の短縮を実施する。アル・プラザでの移動図書館は徐々に認知度が上がり、利用が増えつつある。それでも従来からの利用者が多いため、新規利用の開拓が課題であり、自治会での出張おはなし会などでPRを積極的に行った。また今後も、夏休みなど長期休みにはイベント的にセントラルコートで実施し、周知に努めていく。郵送宅配サービスは、既存利用者はコンスタントに活用しているが、まだなお一般への認知が低いため、関係課との連携を含め、より広い範囲へのPRが必要。バリアフリーサービス対応の資料・外国語資料の受入れについては、購入予算の確保が課題。

今後の課題	令和7年度の活動方針
<ul style="list-style-type: none">・予約本受取ボックスの効率的な運用・地域での移動図書館の実現可能性の検討・バリアフリーサービスの利用者の開拓・非来館型サービスの実現可能性の検討	<ul style="list-style-type: none">・予約本受取ボックスの円滑な運用・アル・プラザ野洲での利用促進・バリアフリーサービスの啓発

図書館協議会評価

- ・他の図書館職員であれば、しないような苦労をし、様々な取り組みをなされて、利用者を増やそうとされていることがとても評価できるし、結果が数字にも表れていると思う。
- ・「誰もが利用できる」をもう少し広げて、現在利用していない人をターゲットにアイデア出しや広報・周知活動にもう少し取り組んでほしい。
- ・郵送配達・宅配サービスはもっと周知されてはどうでしょうか。

B

(評価する点)

・非来館型サービスは、図書館としては悩ましいサービスだと思います。しかし、「市民が読みたい本を提供する」「市民が知りたい情報を得られる」という観点からしたら、形態にとらわれる必要はないようにも思います。

・数値的に見ても十分に高評価できる。図書館の取り組みの効果が表れている。自己評価Bは低すぎるのでは?

・福祉に携わるものとしては、「誰もが利用できる…」の言い方、捉え方は、簡単に使ってほしくない表現です。障害のある方の状態像も様々。子供から高齢者まで、また外国人も含め、社会生活に不自由を感じている方は多種多様で、「誰もが利用できる…」は簡単に達成できる基準・状況ではありません。郵送、宅配、大活字本…などは、一つのツールですが、それらのみで、達成度を判断できるものではありません。それらのことも踏まえ、取り組んでいただければと思います。

上記のさまざまな取り組みは高評価に値します。

・予約本受取ボックス、アル・プラザ野洲での移動図書館事業ともに順調に継続されている点。

・既取り組み内容の振り返りもなされ、より広くより多くの貸出しができるよう改善されている。必要な方に行き渡るよう、サービス内容の発信を継続してください。

・物理的に来館が難しい人に対し、種々の対応を行っている点は評価できる。

ただここで、「“利用したいが利用が難しい”という人のイメージは湧くが、“そもそも図書館は利用したいと思っていない人”というのはどのような人たちなのであろうか?」と、ふと思った。

異なる分野ではあるが、『買わないお客様の分析をすることで、売り上げアップにつなげることができた(東京駅構内「グランスタ東京」マーケティング担当)』といった事例がある。

「図書館を利用しない人物像」を今一度視点を変えてイメージし直してみて、「誰もが」につながる“図書館の在り方”や“何か違ったサービス”が見えてくるのかもしれない。

・予約本受取ボックスのフル稼働状態は利用者のニーズに添ったものです。円滑な利用を目指してください。

・アルプラザでの移動図書館や駅の予約本受取ボックスなどは、(この間判読不能)考えると取組は評価できる。

(課題と考える点)

・「どこでも貸出し」の時代になっていきているのだと思います。野々市でも、周辺の市民が借りに来るのは便利だからだと思います。学校図書館での受け渡し、ブックモービル(本の配達)をやっていきたいですね。先日栗東の館長にお会いする機会があったのですが、ブックモービルに燃えておられました。

「誰もが利用できる…」の現在取り組んでいる内容の周知、PR状況がいかがなものか、今一度、検証してみてはどうでしょうか?少し、周知・PRが弱いように感じます。

・自己評価にも書かれているように、予約本受取ボックスもアルプラザも、従来の利用者の借りる場所が変わっただけとならないよう、これまで図書館に来づらかった方の新規利用の開拓が課題だと思います。それについては、この利用のために新規利用された利用者数がわかり、その数や貸出数が上昇傾向であれば、本来の主旨での「評価できる点」になると思います。

・バリアフリーサービスや外国語(特に非英語)利用者への多言語サービス(多文化サービス)は関係機関(社協や国際協会等)と連携しないと認知度はなかなか上がらないのではないかと思います(それを継続するには人力が必要ですが)。連携について事業報告では取り上げられていませんでしたが、実際のところどうだったのでしょうか。

・誰もが利用できる図書館サービスの周知、認知のPRの強化が望まれます。

・郵送貸出、宅配の周知は、もう少し強化しても良いのでは。

・バリアフリーサービス、多言語サービスは(行政の)横連携が必要となるため、長期的なプランが必要である。